参考資料４

第１回福井県高等学校教育問題協議会　議事録

□日　時　　平成１９年１２月１１日（火）　　１０：００～１２：００
□会　場　　国際交流会館３階　特別会議室
□出席者　　委　　員：金井委員、清川委員、四戸委員、杉田委員、瀬尾委員、津田委員、橋詰委員、馬場委員、福田委員、藤井委員、藤田委員、三上委員、山﨑委員、吉岡委員、吉川委員、吉田委員（代理：連合婦人会服部副会長）、渡辺委員（１７名、五十音順）
　　オブザーバー：県高等学校教職員組合　鈴木執行委員長、県教職員組合　高嶋副執行委員長、県中学校長会　堀田会長、県高等学校長協会定時制・通信部制部　矢崎部会長、県高等学校長会　吉田会長（５名、五十音順）
□事務局　　広部教育長、伊藤教育庁企画幹、加藤教育庁企画幹（学校教育）、山内教育政策課長、中島高校教育課長

○開会

教育政策課長　ただ今から、第１回目の「福井県高等学校教育問題協議会」を開催いたします。

皆様方には、年末のお忙しい中、会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。

また、委員各位におかれましては、御多忙にも関わらず、委員就任をお引き受けいただき、重ねてお礼申し上げます。

なお、委員委嘱状につきましては、本日、委員の皆様方のお席にお配りしておりますので、御確認いただきたいと存じます。

それでは、開会に当たりまして、広部教育長から御挨拶を申し上げます。

○あいさつ

広部教育長　本日は、御多忙のところ、第１回目の「福井県高等学校教育問題協議会」に御出席を賜り、厚くお礼申し上げます。

また、委員各位におかれては、先に御就任をお願いしたところ、本協議会の趣旨を御理解賜り、快くお引き受けくださり、重ねてお礼申し上げます。

現在、教育界は戦後６０年の総決算ともいうべき大変革期の中にあり、教育基本法改正をはじめとして、教育改革関連３法の成立など、さまざまな議論がなされ、大きな改革の流れの中にあります。

また、近年、少子化に伴う生徒数の減少や、産業構造・就業構造の変化は著しく、高校教育においても、こうした社会の変化を踏まえた新しい時代にふさわしい在り方が求められております。

県におきましては、これまでに、総合学科の設置、中高一貫教育の実施、学区・学校群制度の撤廃等の高校教育改革に取り組んできましたが、今後とも、社会の変化に的確に対応し、生徒たちにとって魅力ある高校づくりを進めることが重要と考えております。

このため、本協議会を開催し、今後の県立高等学校の望ましい在り方について検討をお願いすることといたしました。

御検討いただきたい内容は、主に、

・地域の実情を踏まえた望ましい高校の規模と配置
・社会のニーズに対応した職業系学科の在り方
・就学、就労形態に応じた定時制・通信制課程の在り方

の３点でございます。
皆様方におかれましては、生徒たちにとって最良の教育環境を整備するという観点から、課題ごとに集中的に議論いただき、今年度内を目途に答申をいただけたらと思います。
今後、本協議会での議論を進めていただく中で、皆様方それぞれのお立場から、幅広い御意見をいただきたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

○委員、オブザーバー、事務局の紹介

教育政策課長　それでは、委員の皆様方をご紹介いたします。５０音順で御紹介させていただきます。

向かって右側からでございますが、
・学校法人金井学園理事長の金井委員でございます。
・福井県経営者協会副会長の清川委員でございます。
・福井新聞社論説主幹の四戸(しのへ)委員でございます。
・福井県立大学参与の杉田委員でございます。
・前　福井県教育委員の瀬尾委員でございます。
・前　福井県教育庁企画幹の津田委員でございます。
・仁愛大学人間学部教授の橋詰委員でございます。
・連合福井会長の馬場委員でございます。

向かって左側でございますが、
・福井大学学長の福田委員でございます。
・前　大野市教育長の藤井委員でございます。
・元　若狭高等学校長の藤田委員でございます。
・福井県町教育長会会長で越前町教育長の三上委員でございます。
・静岡大学教育学部教授の山崎委員でございます。
今回は、高校教育の全体にわたりまして幅広く研究いただいているということで、山崎委員のご参加をお願いしております。
・福井県高等学校ＰＴＡ連合会会長の吉岡委員でございます。
・元　丸岡高等学校長で道守高等学校長の御経験もあります吉川委員でございます。
・福井県連合婦人会会長の吉田委員でございますが、本日は御欠席ということでございまして、服部副会長に代理で御出席いただいております。
・福井県都市教育長協議会会長で福井市教育長の渡辺委員でございます。
以上でございます。５０音順に御紹介させていただきました。

次に、オブザーバーの紹介をさせていただきます。
右側でございますけれど
・福井県中学校長会会長で光陽中学校の校長の堀田でございます。
・福井県高等学校長協会会長で藤島高校の校長の吉田でございます。
・福井県高等学校長協会定時制通信制部の部会長で道守高校校長の矢崎でございます。
向かって左側でございますが、
・福井県教職員組合の高嶋副執行委員長でございます。
・福井県高等学校教職員組合の鈴木執行委員長でございます。

それでは最後に、事務局を紹介いたします。

教育政策課長　・福井県教育長の広部でございます。
・教育庁企画幹の伊藤でございます。
・教育庁学校教育企画幹の加藤でございます。
・高校教育課長の中島でございます。
・私、教育政策課長の山内でございます。
以上でございます。

○会長および副会長の選任

教育政策課長　それでは、議事に入ります前に本協議会の会長ならびに副会長を選任させていただきたいと思います。

「福井県高等学校教育問題協議会規則」第４条によりますと、「この協議会には、会長および副会長を置き、会長および副会長は、委員のうちから互選する」こととなっております。

そこで、まず、会長を御選任いただき、次に、副会長お二人を御選任いただきたいと存じます。

では、会長の選任に入らせていただきます。

選任の方法につきましては、いかがいたしましょうか。

橋詰委員　私の方から御提案申し上げます。

今日は各界各層の方々が御出席されておられますが、このメンバーでこれから県内高校の在り方を検討していく大事な協議会だと思います。

ここは、福井大学の福田学長に会長をお願いしたいと思います。

教育政策課長　ただいま、橋詰委員から、福田委員を会長にとの御推薦がありましたが、いかがでしょうか。（各委員から、異議なし）

異議なしということでございます。それでは、会長は福田委員にお願いしたいと思います。福田委員、よろしくお願いいたします。

福田会長には、正面の会長席に御着席をお願いいたします。

それでは、福田会長から一言御挨拶をいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

○会長あいさつ

福田会長　ただいま、重要な役割を仰せつかりまして、私自身、このような教育行政には全くずぶの素人で、今年の４月に学長になりたてでございまして、不適極まりないと思いますが、これからの県の教育行政、それから受験に望まれる生徒さんのことを考えますと、できるだけいい諮問案を出しまして、皆様のためになりたいと、そういう気持ちだけは人後に落ちないつもりでございます。私自身は、非常に知識が少のうございます。どうぞ皆様のいろんなお知恵を拝借しながら、目的に沿って努力していきたいと思っておりますので、どうぞよろしく御支援のほどお願い申し上げて挨拶にかえさせていただきます。よろしくお願いします。

教育政策課長　ありがとうございました。次に、副会長を御選任いただきたいと存じます。選任の方法につきましては、いかがいたしましょうか。

瀬尾委員　会長一任でお願いいたします。

教育政策課長　　ただいま、会長に一任する旨の御発言がございましたがいかがでしょうか。
（各委員から、異議なし）
それでは、福田会長から御指名をお願いしたいと存じます。
御指名は、お二人お願いいたします。
なお、規則第４条第４項の規定によりまして、会長の職務代理の順位も併せて指定願いたいと存じますので、よろしくお願いいたします。

福田会長　　私に一任するとのことでございますので、副会長に清川委員および杉田委員のお二人を御指名させていただきたいと思います。
お二人には、大変御苦労をおかけするとは思いますが、お引き受けいただきたいと存じます。
なお、会長の職務代理の順位は、清川副会長、杉田副会長の順序でお願いしたいと存じますので、どうぞ御了承いただきたいと思います。

教育政策課長　　それでは、次に諮問に移らせていただきます。
広部教育長、お願いいたします。

（会長席の前で、教育長が会長に対し諮問文を読み上げ）

広部教育長　　福井県高等学校教育問題協議会会長様、福井県教育委員会
高等学校教育問題について（諮問）
下記の事項について、別紙理由を添えて諮問します。
今後の県立高等学校の目指すべき方向性について
諮問理由
現在、社会経済情勢が大きく変化する中、教育界は戦後６０年の総決算ともいうべき大変革期の渦中にあり、高校教育界においても、こうした社会の変化を踏まえた新しい時代にふさわしい在り方が求められております。
このような中、高校で学ぶ生徒たちが、自ら学ぶ意欲を高め、将来社会の中で活躍するために必要な知識や技能を身に付けるには、生徒が互いに切磋琢磨しながら、一人ひとりの個性や能力を最大限に引き出す「質」の高い教育環境の整備が重要であります。
また、産業構造・就業構造の変化に伴い、職業教育に対する社会や生徒のニーズも一層多様化しております。
さらに、定時制・通信制課程においても、生徒の入学動機や生活状況等の多様化が進んでおり、社会情勢の変化に対応した形態の検討が必要になっております。
つきましては、高校で学ぶ生徒たちにとって魅力ある高校づくりを推進するため、今後の県立高等学校の望ましい在り方について、次の事項を中心に、十分かつ慎重な検討をお願いいたします。
検討事項
一　地域の実情を踏まえた望ましい高校の規模および配置について
一　社会のニーズに対応した職業系学科の在り方について
一　就学、就労形態等に応じた定時制・通信制課程の在り方について
以上でございます。（諮問文手渡し）

教育政策課長　　それでは、以後の議事進行は、規則第５条第３項の規定により、福田会長にお願いすることといたします。福田会長、よろしくお願いいたします。

福田会長　　それでは、早速協議に入りたいと思いますが、ただいま、諮問いただいた内容に従いまして、これから議論を進めていくわけでございますけども、まず、そのために、県内の高等学校の現況につきまして、事務局の方から説明願いたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

高校教育課長　　それでは、本県の高校教育の現況につきまして１２点の表・グラフ等に基づきまして説明させていただきます。お手元の資料４「本県の高校教育の現況」を御覧ください。

まず、１ページを御覧ください。県内における高校の設置状況に関する表でございますが、県立高校が本校２９、分校１の３０校、定員が本年度５，９８０名でございます。私立が、本校５、定員が２，０００名。合計で本校が３４校、分校１校で合計３５校、定員数が７，９８０名であります。そこには４地区に分けて記載してあります。福井・坂井地区の内訳については、福井市の県立高校全日制が７校、坂井地区の県立高校が５校であります。これに私立を併せて１６校です。定時制課程につきましては、本校６校、分校１校の併せて７校、定員は５２０名です。私立の定時制は、福井南高校１校、定員は８０名です。通信制については県立が本校１校、定員は４４０名です。なお、全日制および定時制高校の配置図が、２ページおよび３ページに記載してあります。普通科、職業科、総合学科の別でマークを違えてあります。定時制につきましても、定時制＋通信制が１校、定時制分校が１校というかたちで記載されています。

４ページをお開きください。県立高校（全日制）募集学級数別一覧でございます。１学年の募集学級数について、１１学級の高志高校から、３学級の坂井農業、勝山南、小浜水産高校、１学級の武生池田分校までを記載しております。高志、藤島、武生は昨年から今年にかけてそれぞれ１学級ずつ減りましたが、それまでは福井県の定数が減る中で規模を維持しておりましたので、県立高校の中では規模が大きくなっています。職業系の高校は、定員数が平均で一クラス３３人という形です。例えば敦賀工業を見ていただくと、３０人の４学科という構成になっています。

５ページをお願いいたします。全日制の県立高校の地区別募集学科構成であります。普通科系、職業系の学科をいわゆる小学科まで細分化して、地区ごとに今年度の学級数、募集定員を記載しています。普通学科の学級数は、福井県全体で、１８校に１０５学級があり、定員数３，８１０名、学級平均３６．３人という形になっています。総合学科は、丹南高校１校ですが、学級数が５、一クラス３５人という形です。職業学科については、県全体で、学級数６０、定員数１，９９５名、一クラス平均３３．３人という形になっています。合計で、福井県の県立高校は、学級数１７０、定員数５，９８０名ということで、一クラス平均は３５．２人であります。

６ページをお願いいたします。福井県を北陸の三県の中で比較した表とグラフです。今年度の福井県、石川県、富山県の大学科別の募集定員を記載しております。いわゆる公立高校のみであります。他２県と比較しても、普通科は大きく変わりません。本県の特徴としては、農業系の割合が高い（他県の約２倍）ことがお分かりいただけるかと思います。また、工業系の割合が低い、商業系の割合が高いなどの特徴がうかがえます。大きな特色としては、このあたりかと考えております。

７ページをお願いいたします。

県立高校（全日制）卒業生の大学科別の進路状況であります。上の方の表を見ていただくと、普通科系の学科においては、８割以上が大学・短大等へ進学、職業系の学科においても、ほとんどの学科で４割以上が大学・短大・専門学校等へ

進学しており、特に商業系学科においては、６割を超える生徒が進学しております。福井県の全体の大学進学率は５５．５％と、全国でも上位に入っております。県立でそれを見ていただくと、大学は４６．７％の生徒が進学、短大には９．４％、専門学校等には２０．９％、就職が２１．４％であります。下は、上の表をグラフにしたものです。

８ページをお開きください。これは、県立高校全日制の卒業生の学科別就職状況を表にしたものです。８ページの上の表には、今年３月の卒業生について、業種ごとに就職状況を記載してあります。家庭学科を除き、農業学科・水産学科等を含め、どの学科においても建設・製造業、ものづくりへの就職が一番多くなっています。続いて、卸小売・飲食業に、３番目にサービス業への就職の比重が高くなっている。農業系学科の卒業者が、農林漁業に従事する割合は極めて低くなっています。以上が、福井県の高校生の就職先の概要です。

９ページをお開きください。県内中学校卒業予定者の学校・学科別進学志望者数であります。県内の中学校卒業予定者を対象に、毎年進路志望状況を調査しており、この資料は今年度実施した「進路志望調査」に基づいて作成したものです。今年の９月現在の県内高等学校および福井工業高等専門学校への進学希望者数を記載してあります。全日制の県立高等学校の志望者数と今年度の定員数を比較すると、全体では定員５，９８０名に対し、志望者数７，１８０名と、福井県における県立高校への志望者は、志望者数が定員数を上回っています。一方、足羽高校国際科、三国高校普通科など、４４大学科のうち１３大学科で、中学校３年生の志望者数が定員を下回っている状況です。なお、定時制の志望者は７７名ですが、平成１９年３月、今年入学者は１７０名で、充足率は３４．２％という状況であります。

１１ページをお願いいたします。全県・地区別の高校入学対象者数、高校入学見込者数の推移を表にしてございます。一番上の入学者対象者数といいますのは、全県の小学校１年生から中学３年生の数や、各市町に確認をした人口動態による子どもの数による見込み者数で記載しております。全県高校入学対象者数は、１９年度８，４５６人ですが、５年後の２４年度には８，３３７人で１１９人の減少、１０年後の２９年度には７，８５８人で５９８人の減少、１５年後の３３年度には７，０９２人で１，３６４人の減少となる見込みです。５年後には、全県的には、それほど大きな減少はありませんが、地区別に見ていくと、例えば奥越地区では１９年度６８１人が、５年後の２４年度には６０８名と、１０．７％の減少となる見込みです。いわゆる生徒の流入・流出が全県一区となってからは見られるので、ここ２年ぐらいの数から今後の状況を推測しております。これが変化すると、ある程度の変動は見込まれる数字であることを御理解いただきたいと思います。大きく見ますと、奥越、嶺南、丹南、福井地区という順での減少率になるかと思われます。

１２ページをお願いいたします。１１ページの、平成３３年度までの高校入学見込み数を、各地区および全県ごとにグラフ化したものを記載しております。

１３ページをお願いいたします。参考までに、昭和２９年度から平成１８年度までの本県の中学校卒業者数の推移を記載しております。昭和６２年４月に武生東高校が開校しております。そのときの卒業生の数が、１３，３９５人です。このときの県立高校本校２９校＋分校１校の全日制の体制が、今日まで続いております

１４ページを御覧ください。前々回、平成１０年３月に高等学校教育問題協議会から答申を受けたときには、望ましい高校の規模は「５００人から１，０００人」という答申を受けておりますが、（左側の表は）そのときの福井県下の高校の学級数であります。それから約１０年たって、答申当時の平成１０年度と今年

度の定員数、学級数を比較すると、定員数で１，４００名の減少となっています。地区別に見ると、福井・坂井地区で５６２人減少、奥越地区で２３０人減少、丹南地区で３８３人減少、嶺南地区で２２５人の減少となっています。学級数は、１８６学級が１７０学級、１６学級の減少ということになっています。

以上、表に基づいて福井県の現況を説明させていただきました。

最後の１５ページについては、高問協の答申を受けた近年の県立高校における教育改革について、簡単に記載させていただいています。特に中高一貫教育については、来年４月に、金津、美方、丹生高校に中高一貫連携クラスの生徒が入学してくることになっております。

高校教育に関する現況説明は、以上でございます。

○意見交換、質疑応答

福田会長　かなり詳細なデータをお集めいただいたと思いますが、かなりショッキングなデータが多いということですね。やはり、少子化が確実に進んで、とりわけ嶺南地方などにその傾向が著しいということが読めるかと思うんですが、そういう状況下にあって、これからの教育をどのように考えていくかということが今回の答申の最も重要なことであろうと。先に答申を何年か前にいただいたにもかかわらず、その実情としては、まだ変わっていないという状況が現在まで続いておるという御説明だったと思います。その状況下にあって、これからの、１０年２０年先を読んだ、特に高校教育の在り方がどうあるべきかということが問われているのだろうと思います。

とりわけ、職業を専門とする高校でも、例えば水産等では、水産の専門的な知識を生かしたところに就職する生徒さんが非常に少なくなっていると。そういう職業高校の存在意義そのものが問われかねないというようなものも含めまして、どのように県として考えていくかというところが、大きな問題になっているのではないかというふうに受けとめられます。

大体そういう総論的な動向を受けとめた上で委員の皆様方の御意見をお聞かせ願いたいと思いますが、今日は唯一、県外から委員に御就任いただいております、静岡大学教育学部教授の山﨑委員さんに、まず、全国の高等学校における教育改革の動向、あるいはキャリア教育の取組みなどについて、御専門のお立場から御意見をお伺いできたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

山﨑委員　静岡大の山﨑と申します。座って発言させていただきます。

私は、現在静岡大学に勤めておりまして、キャリア教育や学校経営について研究しております。３月までは、信州大学に勤めておりまして、今年の４月に静岡大学へ移ったわけでございます。

全国の高校教育改革の動向や、その中でも最近進められておりますキャリア教育についてということでございます。現在の高校教育改革ですけれども、一言で言えば、「高校制度の特色化」と「学習内容の多様化」が同時並行的に進んでいるというのが現在の状況でございます。そうした最近の状況に対して、さらに、先ほど教育長さんからも御指摘のありました少子化ですね、この少子化の状況が加わってきましたので、従来の学校規模に対する見直しが全国的に行われているという状況で、したがいましてそこに再編統合という大きな課題が生まれているわけでございます。

まず、現在の高校進学率ですけれども、平成１８年度で９７．７％と、ほとんどの中学卒業生が高校へ進学しているという状況がずっと続いております。ただそこに、少子化という問題がありますので、従来のような高校教育のイメージを少し新しい方向へ変えていかなければならないという状況に来ております。

まず、学校制度についてですけれども、御存知のように、従来の全日制の普通科、専門学科に加えまして、総合学科という新しい学科が現在できてきております。これは第３の学科という、まあ普通科と職業科の２つが従来あったわけですけれども、そこへ第３の学科として、総合学科ができてきたわけですね。ただ総合学科といいましても、福井県ではまだ１校のようですけれども、全国的にも、それほど多くはありません。４パーセント前後であると思います。しかしその４パーセントなんですけれども、従来の普通科や専門学科の高校へいろんな影響を与えておりまして、総合学科において、多様な学びができるということで希望する生徒等もいるという現状になっているんですね。現在の総合学科の数ですが、平成１８年度で２９８校ございます。ですから全国的には、平均しますと各県５校前後あるというような状況になっておりまして、これは年々増えております。大体平均的に２０校ずつぐらい毎年増えております。そして総合学科以外にもいろんな学科が増えているんですけれども、ひとつは単位制高校という仕組みが出てきておりまして、これは、総合学科以上に増えております。単位制高校は、平成１８年度で７３８校出来ております。これは、年々６０校ずつくらい増えてきております。したがって、総合学科や単位制高校が、全国的に非常に増えているという状況にあるわけです。なお、単位制高校につきましては、発足当初は、定時制の現代版のような意味合いが強かったんですけれども、最近は進学校でも、進学の目的をよりよく達成するために単位制に移行するという学校も、少しずつですけれども、増えてきております。以上が制度的な特色からの主なところです。

次に、学習内容ですけれども、これは非常に多様化しておりまして、例えば学校独自で科目を設定できる「学校設定教科」「学校設定科目」という仕組みがございますけれども、若干の例を申し上げますと、普通科でも、「伝統芸能」という科目を置いたり、あるいはコミュニケーションとか、社会福祉、また心理学等ですね、従来大学で行っていたような心理学というような科目も、高校によっては取り入れるというところがあります。あるいは地域に応じて、アルプス研究であるとか、陶芸であるとか、そうした地域の状況に応じた科目を取り入れる学校も増えてきております。そのほか、総合学科では、キャリアデザインというですね、総合学科というのは直ちに専門高校なり、大学進学を目指す普通高校なりというふうに決めないで、若干余裕を持たせて、高校の中で将来、進路を考えていくと、そういう趣旨が強い高校ですので、キャリアデザインという科目を総合学科で独自に置いているという、そういったところが増えてきております。またその他、専門高校におきましても、非常に先進的な、その高校に応じた科目を置く。例えば、テクノアートであるとか、グリーンデザインであるとか、グリーンデザインというのは農業系ですけれども、そうした新しい学校設定科目を置いて、様々な生徒の学習要望や、将来の進路に応えようとしている。こうした学習内容の多様化が進んでおります。

そこへ今、少子化が来ておりますので、各県で高校の再編整備計画が進んでおりますが、これはデータによりますと、平成１０年の時には８県だけでございました。８県が高校の再編統合を計画をしていたわけです。しかし、現在、平成１８年度の統計によりますと、４２都道府県が高校の再編整備の中長期計画を現在立てているという状況でありまして、これはほとんどの都道府県が再編整備計画を立てていると言ってもよろしいかと思います。そのような状況が、現在の高校教育改革の現状でございます。

次に２点目としまして、キャリア教育について少し状況説明をさせていただきたいと思います。キャリア教育というのは比較的新しい言葉なんですけれども、現在、文部科学省と経済産業省と厚生労働省の３つが主軸になって進めております。もちろん、学校教育は文部科学省の支援が最も強いわけですけれども。各都

道府県にキャリア教育推進地域等が指定されておりまして、小学校も含めてキャリア教育を実施しているという地区が全国的に発足しております。したがって、そうした指定地域では、小中高と一貫してキャリア教育を実施していくということになっております。そのキャリア教育ということですが、この意味はですね、職業観・勤労観を育む教育というふうに考えられております。職業観・勤労観と言いましても、比較的広い意味ですので、それを文字通り広い意味に捉えるか、もっと狭く捉えるかでキャリア教育の取組みは２つの面がございます。狭い意味、つまり狭義には、職場体験とか、インターンシップというように、文字通り職業を体験してくるという教育をキャリア教育と言っております。もうひとつ、広い意味では、職業体験にとどまらず、広く将来設計を考えたり、あるいはジョブシャドウイングというですね、体験とはちょっと違うんですが、観察をしてくるという、そうしたものも含めて、広く進路設計、進路学習、進路指導等を含めてキャリア教育ということがあります。ですので、広い意味でキャリア教育を申し上げれば、これは全ての高等学校が取り入れて実施しているわけです。狭い意味のキャリア教育としてのインターンシップですけれども、これも全国的に現在広く行われるようになってきております。文部科学省の統計によりますと、公立学校の６２パーセントがキャリア教育を実施しております。特にインターンシップという形で実施しております。私立は３５．８パーセントでございます。平均しますと、公私合わせて６２．８パーセントの高校がキャリア教育を実施しております。そして、そのインターンシップですけれども、大体２日か３日程度、職場へ行って、体験をしてくるというような行い方になっています。２日か３日というのは、普通高校、専門高校ほとんど同じですが、専門高校の方が、若干日数が多い傾向にあります。これは、ただ単に現場へ出て職場体験をしてくるだけでなくて、学校の先生方が、事前事後の指導、そして将来の進路設計につながるような指導をされております。こうしたキャリア教育が現在拡大しているわけですけれども、その背景にはやはりフリーターやニートの問題、そして少子化の時代にふさわしい進路指導等を考えて、よりよい学習や進路指導を目指して、こうしたキャリア教育を取り入れているわけでございます。

以上がキャリア教育の現状でございますけれども、キャリア教育に若干近いところにですね、高大連携というものがございます。これは、普通科等の生徒にとってみれば、将来の進学に関するキャリア教育であるというふうに言うことが出来ます。この高大連携は、今非常な勢いで進んでおります。福井県においても実施されていると思いますけれども、例えば、大学の先生が高校へ来て、出張授業等を行うという、そうしたことを取り入れている学校は、全国で１，７８１校ございます。また、今度は高校生が大学へ行って、聴講生として大学の授業を聴くという、そうしたことは７６６の高校で行われております。これは、全国の数字でございます。さらに、それを大学の方で単位認定しているというところも３９４校ございます。そのように、キャリア教育のひとつの方法として、特に普通科を中心とした高大連携も最近広まっているという状況でございます。以上がキャリア教育やインターンシップ、高大連携の状況です。

そうしますと、これからの高校教育ということについては、そうした制度の特色化と、各学校における学校の学習内容の多様化や特色化を今後行っていって、それを生徒の進路保障へどのようにつなげるのかというところがこれからの大きな課題になろうかと思います。そして、高校だけの問題でなく、中高の連携をどうするのか、あるいは高大の連携をどうするのか、ということも、これから高校教育全体として、全体の課題として考えなければならないだろうと。そして、専門高校の特色化をどうするのか。そうした課題の中で、学級の適正規模とか、適正人数というものも、今後考えていく必要があろうというふうに思います。以

上、全国状況などについて述べさせていただきました。

福田会長　どうも、詳しい説明をありがとうございました。今の説明を聞いておりますと、まず教育の改革の具体化は、ほとんどの県で行われておるということでございまして、わが県においても、当然その方向で考えていかなければならないということを御示唆いただいたものだというふうに思います。すでにわが県でも行ってはいるんですが、まだその意味において、例えば先程来いろんなデータで示されたような実業高校と申しますか、農林水産とか職業高校ですね、そういう職業高校での進学や就職の動向の特徴、それをどうこれから反映させ、あるいは生かしていくのか。あるいはもしそういう高校を統廃合するというような問題が起こった場合ですね、かなりやはり、各地域にとりまして、学校、小中高いずれにしましても、ある意味では文化のより所としまして、かなり地域の中核を占める部分がございます。当然、その地域の人の思い入れもございますから、これはなかなか、一概に改革と申しましても、行うことが難しい面もございます。そういう面をどのように考えていくのか。それから、キャリア教育は、ある意味では、これは高校の質的な変化、数の上だけではなくて、質を変化させることによって、高校の教育課程を変えていくということの部類に属するかと思われます。特にもう一回、山﨑教授にご発言いただきたいんですけれども、いかがでしょうか。こういう数を減らすという統合再編という動きとですね、いわゆる質を変える、キャリア教育のような形で性質を変えていく動きと、どっちが主体になっているんでしょうか。

山﨑委員　両面が同時に進行しているというのが現状であろうと思います。キャリア教育は時代の要請でありまして、専門高校におきましては、インターンシップを取り入れて、より専門高校の職業教育を充実させるという面がありますし、普通科高校におきましては、普通科のアカデミック科目を中心とするんですけれども、それが自分の職業、将来にどういうふうに関係していくのかと、大学等へ行って、研究室まで訪ねて、その実際を調べてくるという、そういう時代の要請の面がございます。

一方で、再編統合につきましては、どうしてもこれは少子化という現実的な人数の問題、あるいは予算上のことがもしかしたらあるのかもしれませんけれども、そうした面がございます。で、これを両立させなければならない。したがって、少子化の中で、少人数をうまく実現しながら、キャリア教育等の学習も充実させていくという、車の両輪のようにですね、二面をうまくやっていく。そして、人数が少ないところを、例えば中高一貫を取り入れて、中学生からの入学を確保していく。ただその場合に、高校に魅力がないと、中高一貫の中学生がですね、その連結している高校へ入学してきませんので、高校の魅力を学校設定科目等や先生方の努力で実現していくという、同時並行的といった方がよろしいかと思います。

福田会長　山崎委員の詳しい説明で、問題点がかなり全国的動向を含めて明らかになってきました。それに照らして詳しい統計資料の説明がありまして、本県での問題点が明らかになりつつあります。出席の委員の方々で、全体を通して御意見、御質問等はございますか。ご自由にお手を挙げて、発言願いたいのですが。

山崎先生に再度、伺いますが、先ほどの統計の説明では、必ずしも、専門的な高校を卒業しても、専門性を生かす分野に就職している生徒が少ない。どのように考えるといいのでしょうか。

山﨑委員　　産業構造の変化等が背景にあるかと思いますけれども、少し時代の状況を見て、専門高校の役割について新しい見方をする必要があるのではないでしょうか。福井県の資料の御説明にもありましたが、職業系高校でも、進学者が増えています。ですから、中学校への高校側の学校説明の段階で、大学との連携を考えた７年間の専門教育をするのだという発想や、就職を希望して専門高校に入る生徒さんには、地域の職場体験や地域人材を生かす地元の商工会等とのインターンシップや職場体験等を組み入れるなど、現代の条件に合わせた制度を作っていくことが大事であろうと思います。

福田会長　　本県の問題点をいくつか挙げられると思いますが、それをどうするか。まず、少子化によって確実に福井県にも大きな波が押し寄せてきていること、特に嶺南などにおいてそのような傾向が強いということです。それから、専門高校の就職率がだいぶん低下している問題などが全体的に大きな問題として生まれてきていますが、各委員方はどのようにお考えでしょうか。

橋詰委員　　先ほど事務局と山崎先生の御説明を受けて、現状の福井県の高校の有様は、正直言いまして、現状にあっていないという事実が出ていると思います。これから、さてどうするかという話になっていくと思いますが、教育の現場の視点はもちろん大事なのですが、福井県の有様、地域間格差とか言われますけど、ある意味では、地域間格差・少子化は避けられない問題だと思います。格差というもの中に、地域の特色があると思います。地域の特色をどう生かしていくか、このような教育問題を語ると同時に、福井県の将来の有様というものをどのような形にしていくかを考えていかなくてはいけないと考えます。早くビジョンというものを設定し、石川県・富山県とは違った有様とか、東京や名古屋などの大都会とは違った有様のものを作っていかなくてはいけない。それに、教育というものを併せていくことが大事であると思います。大学の学生をよく見ていますと、一番に学生が真剣に考えているのは、就職活動なのです。就括に関して非常に情報を集めています。やはり、将来設計と自分の職業をどう考えていくかが一番の関心事なのです。個人的に言えば、もう少しゆとりを持って、大学４年間でもっと本格的な勉強をしてほしいと思うのですが、学生の関心事は、３年生になると、ほとんど就括です。その情報の集約と情報の伝達とかをお互いに話し合っていくことは、非常に真剣に考えています。教える側の私達以上に真剣です。真剣に、福井県の社会の有様に向き合っているということではないでしょうか。福井県の地域と将来性を併せて考えていってもらいたいです。

福田会長　　今のご意見は、ひとつの別の切り口から福井県の将来ビジョンあるいは福井県が将来どう発展していくかということを考えた上での教育の方向決めでないといけないとのご意見だったと思いますが。

藤田委員　　少子化によって、数の改革つまり学校数や学級数の改革が必要と思いますが、もう一つ、質の改革において、この会議の中でどの程度まで質の改革の話し合いがなされるのか。いろんな県側の予算も絡んでくるかもしれませんが、専門学科の質が大きく変わるという場合が出てくると思うのですが、質の改革について、どこまで、話し合えることができるのか。たとえば、新しい学科、専門学科を作ることなど、そこまで、この議論の中で話し合いができるのか。現在ある学科で、これはいらないということまで言えるのか。どなたに聞いていいかわかりませんが。いかがでしょうか。

福田会長　　これは、教育長に答えていただいた方がいいのではないでしょうか。

広部教育長　　今回諮問させていただきました内容に、社会のニーズに対応した職業系学科の在り方の御議論をお願いいたしているところです。皆さんは御承知かと思いますが、たとえば農業系学科につきましても、必ずしも、相当数が将来農業をやりたいために農業系の学校に進むということにはなっておりません。そのようなことが職業系学科の中に多々見られます。そのあたりがミスマッチとなっております。このままでは、本来のキャリア教育が役割を果たさないようになってしまいます。このことを踏まえまして、質の問題について、この会の中で議論を賜わって、極端に言えば、もうこのような学科は見直すべきであるとか、総合学科の移行を考えるべきであると言った議論も広くお願いしたいと思います。

福田会長　　かなり自由に、ここで御意見を賜って、それを具体的に県として実行に移すかどうかの段階は、また一回、考え直していただくということとしまして、ここの会は、むしろ自由、活発なご意見を言っていただき、どんな極端なご意見でも出していただいてよろしいのではないかと思います。山崎委員に整理していただいたような、数の問題と質の問題の二つの点があると私も申し上げました。地域の実情を踏まえた上で、望ましい高校の規模と配置について、先ほど地図がありましたが、どのようにお考えになるのか。今、まさに話がありました社会のニーズに対して、昔と今、１０年前と比べてニーズがまったく同じなのかどうか。変わってきているのかどうか。たとえば、総合学校として生まれ変わって、総合学校を主体にしてやる方がいいとお考えになるのかどうか。あるいは、もうひとつ大事な点は、定時制・通信制課程も１０年来、同じ課程・同じ形態を保っているということで、これをどうするのかという大きな問題がございます。これらのことについて御意見を賜りたいと思います。

清川委員　　社会のニーズに対応した職業系学科の在り方ということで、これは福井県だけの問題ではないのでしょうけれど、国家技能検定ということで、われわれの業界のことでも、酒屋さんのことでも、表具屋さんのことでも、大工さんでも、技能検定はあるのですが、ほとんど、昔のローテクと申しましょうか、それはものづくりの基本ということで、学校でやるのはいいと思うのですけど、実際に社会に出て間に合うのかという問題、それから、今の工業高等学校へいろんなことで訪問するのですが、見ていますと、何でもハイテクでなければいけないというわけではないが、ローテク過ぎるような手回しの旋盤を使ってみたり、手で押すようなボール盤を使ってみたりがほとんどであります。基本は大事なことだと思いますが、就職した場合、まったく間に合わない。基本はあっても、最近は旋盤にしても、ボール盤にしても、いろんな工作機械にしても、コンピュータで動いていますので、せっかく工業系の学校を卒業しても会社で間に合わない。その関係で、自信喪失といいましょうか、職業系の学校を卒業した生徒が、学んだ勉強の職業に就くのが少ないのではないか。そのことが関係しているのではないか。

確かに、基本を学ぶというのはいいのですが、基本と実際の社会の動きにギャップがありますので、学校の統合の問題もありますが、やはり、金を使って、今のニーズに合った、社会に出ても間に合う指導が一番大事だと思います。社会とギャップの少ない授業体制に移行した方がいいのではないでしょうか。

福田会長　　ものづくりの点から、特に最先端の技術で事業をされている目から見ると、工業高校を例に挙げられましたが、必ずしも、社会的なニーズについていっていないのではないかとの御指摘だと思います。全体が社会ニーズに合った専門教育・

職業教育であるべきだろうという御意見であると思います。他に御意見はありませんか。

馬場委員　確認をさせていただきたいのですが、１ページの定時制に通っている方の数は、これでよろしいのでしょうか。定時制の課程に通っている方は、合計６００名でいいのでしょうか。

高校教育課長　これは１学年の定員です。この４倍が全体の定員でありまして、３４％の充足率で、６６３名が現在定時制で学んでおります。

馬場委員　何を言ってもいいということなので少し述べさせていただきたいと思います。この会議は高校教育をどうするかが課題、大きなテーマでありまして、再編も含まれているという若干の含みもありましたし、その意味では、今の福井県の現状を少し見ておかなければならないという思いもしております。今、福井県内におきまして、ニート、フリーターといわれる方々が７，０００名から８，０００名出てきていると労働局の調査で言われております。すると、教育というのは就職するということが一つの前提となる教育もありますし、字を学ぶという教育もありますし、社会的な領域の教育もあり、いろいろ幅広い教育という課題があります。その中において高等学校をどういう位置付けを持って捉えておくのかという思いを持っております。私たちの時代には、就職をしていく一つの手段として高等学校教育を捉えていました。ただいま、先生方の御意見を聞いておりまして、やはり学校教育の中においても、いろんな多様な人格または多様的な社会的な状況が生れてきているという実状の中におきまして、私自身は、高校の生徒は、大学生も含めて、少し精神的に若年化しているのではないかという思いを持っております。その意味では、今高等学校教育の中でも、皆さんも御存知のように、社会的にいろんな事件なり不祥事なりが生徒の中で生れてきている。このことも、大きな教育という立場の中で我々自身が考えていかなければならない課題だろうと思っております。その意味では、後ほどいろいろ議論されると思いますが、学級の数、生徒の数の問題にしても、先生方がしっかりと受けとめられるような人数で教育に携わっていく必要があると思います。

それと、今の学校教育の中において、特に職業系の中において、今の日本の社会、福井県の社会の中において、先ほども意見が出ていましたが、本当にニーズに合っているのか、そのことを真剣に議論していかなければならないのではないか。例えば、農林高校なり水産高校がありますが、福井県の中において卒業生が活用されている地域性というか地盤があるのかないのか、高校を出て、働く場所があるかというと正直申し上げて福井県にはないといいますか、そういう状況にある。今の若者自身が汗をかく仕事は避けて通る状況にあるということ、そういう意味では、職業系の中で、我々自身も、親も含めてですが、働くということに対しての価値観というものをどう教育の中で植え付けていくか。やっと高校を出て、大学を出て就職したにもかかわらず、離職してしまうという現状が福井県の中においても強く生れてきているということをわたしたちは捉えておかなければなりません。その意味では、先ほど清川委員からお話がありましたけれども、連合としても経営者協会の皆さんも含めて、そういった課題についてもいろいろ議論を、知恵を出し合って考えているところでありまして、福井の実状に合った中での教育について考えていただきたいという思いを持っております。

地域の中において、定時制の方々のことも確認をさせていただきましたが、高校においても、中学においても、家庭環境の中に、親の格差、生活面の格差が生まれておりまして、やはり、定時制の中のおいても、６００名近い方々が通って

いるということは、大きな社会的な意味合いを持つのではないかと思っております。先般、ある定時制の方とお話をさせていただいたのですが、「普通の高校とは違った雰囲気の中で勉強が学べます。」とのお話を聞きました。なぜかなと思いましたら、「いろんな年齢層の方がいますし、服装も自由だし、または、いきいきといいますか、違った友情関係を含めて、いろんな方面からの学びも生まれてくるのですよ。」というお話を生徒さんから聞かせていただいた経緯もございまして、その意味では、これからの学校の有様も含めて、もう少し今の時代にあった学校づくりというのを我々自身、親が考えていかなければならない課題ではないかとの思いを持っています。以上であります。

吉川委員　先ほど、山崎先生から高校制度の特色化と学習内容の多様化というお話がございまして、それをつなぐものがキャリア教育だと思っています。各普通科、専門学科、総合学科とありますが、それぞれに生徒がキャリアアップ、キャリア開発を見えやすく、それに取り組みやすい学校が必要だと思います。その面で、話を進めていく中で、各学校ごとのキャリア開発の流れ、各学校にコースがあると思うが、そこでどんな夢があって、どのようにキャリア開発を進めていくかが見えやすい学校づくりを念頭に置くのもひとつではないかと考えています。

福田会長　キャリア教育の重要性を重視してはどうかという御意見だったと思います。

藤井委員　事務局にお聞きしたい。諮問理由に３点ありますが、この３点はいずれも高校の規模および配置、職業系学科の在り方　定時制通信制課程ということで減っていくことばかりが挙げられています。そうすると、諮問されている内容自身が、これは切り捨てのための諮問という印象が強いのですが、先ほど山崎委員がおっしゃった中で、再編という問題と質を高める問題との両方があるということの中で、再編が前面に出て、質を高めるということが弱くなっている印象を受けます。どんな意見でも言っていただければということでありましたが、諮問されていないことについて、質を高めるという意見が出された場合に諮問文との関連でそれはどのように取り扱われるのか。そのこと自体がどのような意味を持つのかといったことで少しお考えをいただきたい。

広部教育長　今回は、この３点を諮問させていただきました。「高校の再編ありき」では決してございません。先ほど表で生徒数が減ると説明申し上げましたのは、これは、あくまでも将来を展望する中で、データ的にこのような傾向になるということで御理解を賜りたいと思います。私どもが是非とも今回お願いしたいのは、これらを踏まえて、将来福井県の子どもたちが、いかにして、どのようにしたら一番良い高校教育を受けられるか、望ましい高校教育を受けられるか、それが視点です。決して、どこの高等学校を減らすとか、再編するとか、そのことが目的ではございません。あくまでも、将来、福井県の子どもたちがどのような高校教育を受けたらよいか、それが最大のポイントでございます。それから、一番下に書いてございます定時制通信制につきましては、先ほどは舌足らずで申し訳なかったのですが、御承知の方も多いと思いますが、現在の定時制は、昔の福井県の機屋さんで働く子どもたちの受け皿、そのことが目的で設立された趣旨が大きいわけですが、現在はそういったことにはなっておりません。今、道守高等学校の校長もオブザーバーとして来ておりますし、定時制の校長経験の方にも委員に入っていただいておりますが、お願いしましたのは、入学者の中でそういったミスマッチが生じております。例えば、今、ほとんどの定時制の入学希望者というのは、言葉は、こんなことを言っていいか憚られますが、中学校で不登校であった生徒が非

常にたくさん入って来ています。そういった面で、また別の面で立ち直って勉強して卒業されることも現実的にはございます。そのことも見据えながら、一番望ましい定時制の在り方はどうしたらよいか、今の現況は、私どもにも責任があるのだろうけれども、旧態然とした制度になっている。その辺も是非見直しをお願いしたい、そういうことでございます。

福田会長　　わかりました。ありがとうございました。単に縮小を大前提としただけの議論ではないというふうに思います。と申しますのは、やはり県としても時代がだいぶん変ってきています。今の話にもありましたように、ずいぶん社会的なニーズが変ってきています。実際入って来ている人数も減ってきていますし専門性を生かす方向性も鈍化してきているというか、変ってきています。そんな中にあって、例えば再編し統合するにしても、大きく分散するより、集中した上でさらに質を高めた教育をやるということも可能になるわけでして、再編・統合イコール数を減らすためだけではないと思います。再編・統合により、一つ一つの機能をより高めるという側面も当然あり得るわけで、そういうことも含めた上で御議論いただきたいということだろうと思います。機能を高める中で一つの質的な変化として、総合学科というものを取り入れて、その中でさらにキャリア教育というものを取り入れて生徒のニーズにより合っていくということもあると思いますし、また、中高一貫教育ということもそこで意味が出来てくると思います。

杉田委員　　全体の現状をお聞きしまして、いくつものブレといいますか、そういう問題が福井県に出ているのだなということを感じます。私も、前回の高問協で委員をやらせていただきました。その時も「魅力ある高校をつくる」ということが大きなテーマでありましたが、残念ながら、まだ十分に機能していないのか、あるいは世の中の進展に追いつかないのか、その辺りが大きな問題として出ているように思います。特に、先ほどから話に出ている、水産高校の卒業生が一人も水産の方に行っていない、こういう現状ですと、例えば、学校の雰囲気というのはどのようになっているのかなと。教える先生方も寂しい気持ちではないかと思うし、子どもたちも実習とか実験とかをやっても、なんだか自分たちの将来に結びつかない、そういう大きなズレ、3年間がほんとうに充実したものになっているのかということを考えますと、非常に、これは放っておけない危急の問題ではないかと思います。それと、これは、おそらく水産だけでなく、農業、その他の職業系全般に言える傾向なのだろうと予想されるわけです。しかし、これを解決する手段はたいへん難しいと思いますが、目先にとらわれて、子どもの希望が少ないからやめればよいという問題ではないだろう。と言いますのは、例えば、今世界的な、あるいは日本全国的な問題を考えた場合に、食糧の問題、あるいはエネルギーの問題、環境問題こういった問題は非常に重要なテーマになってきておりますし、それを考えますと、福井県の農業の養成者をどうするかということも非常に大きなテーマであるわけです。したがって、先ほど山崎先生から全国のいろんな例を出されましたけれども、福井県において、福井県にふさわしい、福井県の特徴を生かした職業系の学科というのをもう少し長い目で検討することも大事ではないかと思います。あまり目先だけで考えてしまうと、将来に禍根を残す恐れもあるのではないかと思います。そういう形でいきますと、学校の統廃合の問題も出るだろうとは思いますが、その辺もクリアしながら、いかに魅力的な職業系の学校を子どもたちに与えるかということが一番大事なテーマ、ねらいどころではないかと思います。今後、この会議でその方向で検討していただければ、大変良いのではないかと思います。

福田会長　今の御意見は、単に希望者が少ないから、それを切って捨てるということではなく、最良の、興味を持てるような教育を、職業系を含めて、まず考えるべきだろうという御意見かと思います。先ほども出ております、例えば県のこれからの方向性に沿った考え方、高校の在り方を考えるということに相通じるものがあるように思います。

吉川委員　先ほど、説明不足の所がございました。キャリア教育を学校の中でするのは当然ですが、それ以前に、学校を再編する場合に、生徒たちが、キャリア開発をしやすい、見えやすい、そういう学校を、例えば携帯を購入する場合に、金額が２年間で支払えるようになっていて、料金等が加算されていたり、機能も全然違うということがあります。学校に入っても、何になりたいか、どういうことを積み重ねていけばよいかがわかりにくい、勿論、学校自体が学校の中で取り組むことも大切だが、学校を再編する場合の考え方として、キャリア開発、あるいは将来の生き方が見えやすい学校づくりが必要ではないかというのが先ほどの私の気持ちです。

それからもう一点、定時制について、先ほど教育長からお話がありましたが、これは、また別途議論があるのでしょうか。その時にまた意見を述べたいと思っております。

福田会長　キャリアデザインを重視したような、そういう在り方があってもよいのではないかという御意見かと思います。

四戸委員　先ほど、山崎先生のお話で大変興味を持ったのは、人数の少ないところを、中高一貫でカバーできるようなニュアンスのことです。例えば、かなり地域が小さくなってきて、高校も中学校もおそらく規模を縮小して統合とかそういう問題がある場合に、中学同士の統合だけでなく中高一貫という形で統合されれば高校も残るし、地域の中学校も残るというようなことを研究されたらいいと。もちろん、中高一貫教育のよさというのもそこに生かしていくということで、今、実際に池田でやっておられるのが、どの程度成果をあげているのかということが非常に興味深いと思いました。同時に、高校大学の連携の広がりとか、小中とか、いわゆる壁を破るということをもっとやればよいとか、その中には、先ほど言われた社会教育というのも、農業などもっと社会教育等と結びつけていけばどうか。地域における農業教育の重要性は当然わかっていますし、また社会人とか、農業をやりたい、帰農する方もたくさんおられますから、そういう方との連携とか、地域全体で考えていく。それから、学校の仕組みも、高大と中高とか、単位制　定通制とか、そういういろんな仕組みがきちっと分かれているのではなく、多少入れ込みがあるような仕組みがあるといいのかなと思います。例えば大学も、学部の連携とか二つの大学、三つの大学で一つの学部を作ろうとか、そういうのを今文科省が認可しようとしている。それと同じように、高校も、Ａ高校とＢ高校の良いところを一人の生徒が享受できるような仕組みがあってもよいのかなと。高校の地域的なバランスも、今いいバランスで配置されているものを、この地域のこの高校をなくすとかいうのではなく、多少高校生の規模は減っても、残せる方法というのがあるのではないかと、中高一貫も含めて検討してほしいと思います。

福田会長　連携した大学院とか、連携した大学とか、そういうものに匹敵した連携高校、高校連携があってもいいのではないかという斬新な御意見だったと思います。

橋詰委員　　学校の特色作りというところに話が及んでいると思うのですが、高校には公立高校と私立高校があり、私立高校は、私立の学校の教育方針にしたがってカリキュラムとか学科編成をしていると思うのですが、基本的なことをお尋ねしたいのですが、公立高校においても、それぞれの学校の地域性とか、特色づくりというものは行われていると思うのですね。その裁量権というか、私たちの高校は、こういう地域の要望もあるし、こういう教育を提供したいというようなことに対する裁量権はかなりあるのか、それとも、どこかに規制があるのか。ちょっとお尋ねしたいです。

高校教育課長　　はっきりとした規制はないと思います。例えば、それぞれの高校が、特に全県一円になってからは、特色を出そうとして対応をしております。美方高校では、地域に根ざした学校ということで学校と地域の結びつきが、学校後援会という形でいろんな運動部、および文化活動も含めて支援をしていこうという形で特色を出そうとしておりますし、そういうことは各学校が今取り組んでいるところだと理解しております。

橋詰委員　　かなり自由にそういう教育は提供できるわけですか。

高校教育課長　　そういうことになると思います。

福田会長　　事務局にお伺いしたいのだが、総合学科の設置が丹南高だけ今設置されていますが、これがさらに増える傾向は近々ありますでしょうか。

高校教育課長　　現在のところは、今、丹南高校だけで、それ以外の高校に広げる計画はございません。

福田会長　　総合学科を設置した結果として、丹南高ではどのような変化、具体的にみられたかを教えていただきたいです。

高校教育課長　　丹南高校の場合には、美術系、デザイン系に少し力点を置きまして、地元の漆器等も含めてですが、そういう中での総合性というところに一つの特色を置きました。そこにおいて、生徒の人気は、中学生の志望はそれなりに高まっていると思います。ただ、それが今実際の将来にわたる、長い意味で生徒たちがそこで学んでどうだったかということはまだはっきりしていませんが、だいたい４割くらいが地元で就職しています。

福田会長　　もうひとつ、中高一貫教育の実施ということが、資料の１５ページに書いてございまして、金津地域、朝日地域等で実際行われているということが書いてございます。これは、ずいぶん先ほどからいろいろな方から御意見がでましたけれども、設置される前と後とで、一貫教育による効果と申しますか、相互的に中学校、高校の存在意義の効用といいますか、そういうことが見られているのでしょうか。

三上委員　　先ほどから中高一貫の話が出ております。私の地域、越前町において、朝日中学地域ということで指定を受けています。今年中学３年生が卒業いたしまして、来年度丹生高校へ入学していきます。先ほどから出ていますように、学校の魅力づくり、保護者は、子どもが卒業をするとき、いわゆる出口にどういう魅力を作ってくれるか、そして、高等学校の中でどのような教育をしてくれるか、そうい

うことを非常に気にかけております。そういう中で、今ようやく中学校が終わって実際に高校へ入っていく。非常に先生方は努力をされています。この新しい制度を入れることによって、中学校と高校の先生の意識が非常にすばらしいといいますか、意欲といいますか、そういうものが非常に出てきました。こういう点では私はありがたいなと思っています。ただですね、マイナス、クリアしてもらいたい所がありますのは、今福井県の中高一貫の場合は、一部の中学校の生徒と一部の高等学校で、全生徒でございませんから、その辺が非常にカリキュラム上、指導上問題点を抱えております。

そして、中高一貫は６年間であり、小学校５年・６年で、進路を考えなければならない。保護者の方は、やはり子どもの未来、自分の子どもに対する将来の可能性を考えております。そうすると中学校の１年生のときに、あなたはどこの学校の生徒ですよと、こういう指定がなかなかしにくい。そういう中で、１、２年生の時は進路指導をしっかりやっております。その中で高等学校の先生も来てくださって、授業展開しております。これが、これから３年後にどういう結果が生まれてくるか、私は期待をしながら、先生方と話をしております。また、いいことは、子どもたちにもその新しい制度の中で意欲的に、自分の将来を考えながら設計をしている点が見られるし、また中学校の先生と高等学校の教員のつながりも大変よくなってきています。何をやっているかということもわかっていますので、そういうことで効果が出てくるのではないかと、将来に期待をして、中高一貫を展開しています。これから考えなければならない問題は起こってくると思います。

今は、中学校は地域の教育委員会、高等学校は県教育委員会です。ここの問題もかなりありますね。そういう中で県立一本にされると大変良いですが、今度は少子化の問題の中でどういうことが起こるかというと、県立で中学校を作られると、中学校の教育の力というか、活力というか、生徒が、その地域の生徒が何人か県立へ行くと、奪われる。こういう現象が起こってくる可能性を考えています。そのあたりをどうクリアしていくかは大きな問題だと思います。そのあたりを考えながら中高一貫を進めなくてはいけないかなと、私は今、実感をしているところです。以上です。

福田会長　　どうも貴重なご意見ありがとうございます。

広部教育長　　中高一貫につきましては、今、越前町の教育長からご説明がありましたが、今、丹生高校と金津高校、それから美方高校、３高校において、初めて来年の４月に入学生を受け入れるということで、私どもと学校の現場または中学校の先生方とも、いろいろ慎重に準備を進めております。それで本当の成果というのは、その３年後に卒業生がどうなるかという結果が出てくるわけですが、私どもは今現在、全県一円、どこでも好きな高校へいけるようになりましてから、ともすれば、今おっしゃったように、一部の高校へ流れがちな傾向もございますので、とにかく地域の高等学校が特色ある、力をつけて、どんどん発展していってほしいと、こういった願いで、いろんな施策を進めております。

福田会長　　はい、ありがとうございました。はいどうぞ。

馬場委員　　親の考え方や先生方の考え方などの説明はありましたが、生徒達の思い、考え、そういう部分でのアンケートなり、それを聞いたというケースなどはデータとしてないのですか。

高校教育課長　今のところ、そういう数値的なデータ、中学校３年生の連携クラスのアンケートについては、今のところは、まだとっておりません。

福田会長　ほかに。はいどうぞ。

吉川委員　いろんな制度の中で、今後の協議の参考にさせていただきたいのですが、学校群制度を廃止されましたが、当然学校選択の自由ということでは、当たり前の流れだと思いますけど、その他に廃止する場合にどのような狙いを持って廃止され、それが達成されたか、あるいは、ほかに問題点は生まれなかったか。簡単で結構ですので教えていただくと協議に参考になるかと思います。

高校教育課長　学校群を廃止したのは、基本的には各高校がそれぞれ特色をつくり、それを目標とした生徒が行くという、教育の活性化を一つ大きなねらいにして始めたわけです。毎年、どの程度の生徒が旧学区からどの学区へいろいろ入っているかという調査は毎年しております。大きな変化はございませんが、先ほど教育長も申しましたように、やはり、若干福井市への集中ということが起こっておりますので、一つの課題としましてはやはり、他の地区の学校のより魅力ある学校づくりが一つの課題だとは思っております。

福田会長　はいどうもありがとうございました。
時間もまいったようでございます。必ずしも、この諮問事項に縛られた議論ではなくて、全体的に第１回ですから、広く皆様、委員の先生方の意見を承ったということにさせていただきました。次回以降は、もうちょっと絞った議論をする必要があろうかと考えております。こういうことで、バトンタッチをしたいと思いますが、いかがでしょうか。

広部教育長　ありがとうございました。私ども、今事務局もいろんな資料の提出、お求めあれば、どんどん調べまして出させていただきたいと思います。次回等につきましては近県の、石川、富山県の状況等についても調査してございますので、そのデータ等についても出させていただきたいと思いますので、どうかよろしくお願いしたいと思います。ただ、協議の順番につきましても次回、整理をしていただけたらと思います。先ほど申し上げました定時制通信制課程、それから職業系学科、高等学校の望ましい規模等の３点ございますので、そのあたりよろしくお願いしたいと思います。

福田会長　進行の方、事務局にお返ししたいと思います。

教育政策課長　貴重な御意見をありがとうございました。なお、本日の御発言につきましては、概要として議事録としてまとめまして、ホームページ等での公開もさせていただく予定ですので、前もって御了承の程お願いしたいと存じます。
今後のスケジュールでございますけれども、本協議会につきましては、今日の第１回を含めまして、３月までには４回から５回開催をさせていただきたいと考えております。２回目につきましては、来月の中旬ぐらいということで考えております。
次回の議論の内容につきましては、今教育長が説明申しましたように、３点のうち、ある程度絞った形で御議論を深めていただこうと考えておりますので、また、会長と相談の上、皆様にお知らせをしたいと思っております。また、今後、資料作成する上で、各委員の方に個別に御意見を求めるといったこともあろうか

と思いますけれども、そのときには是非御協力のほどよろしくお願いしたいと存じます。なお、お手元には第２回の開催のための日程調整の表もお配りしてございますが、出欠の可能性等の御記入をいただいた上で、事務局にお返しいただければ幸いでございます。

それでは、第１回の会議はこれで閉会とさせていただきます。本日は、本当にありがとうございました。

以上